



内田百間『冥途』論(二〇〇八年度卒業論文要旨集)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007315

単行本『冥途』は、初出が別々である十八短編の集まりである。従来の研究において、単行本『冥途』は百閒が夢のように描いた作品集であると指摘されている。確かに、作品内の独特な秩序やとりとめのなさから夢のように描いたと考えられる。

そこで本稿では、本作品全体を百閒が夢らしく描いた創作であると仮定した。また、各作品の稿了の年月と、単行本『冥途』の収録順は大きく異なり、『冥途』が最後に収められていることに着目した。これらから、単行本『冥途』を一つの作品として読むことが可能であるかどうか分析・考察した。

作品構成の分析を進め、各作品は三つの舞台構成になっていることを明らかにした。また、分析を行う中で、水・土手・道という類出語に着目し、各作品に〈支配から逃れられない場所への逸脱〉という共通の主題があることを明らかにした。しかし、本作品の最後に収録されている『冥途』はこれらの共通項を持ってはならず、このことについても分析を進めた。『百鬼園日記帖』の「子供に神祕的な恐怖を教えたい」「臆病と云う事は不徳ではない」という百閒の記述から、『冥途』において「私」を自分の領域に帰って来させるという意図があったと判断できている。以上のことから、単行本『冥途』が一つの物語を構成しているということを明らかにした。